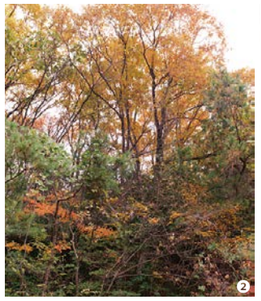


❶雑木林の中でひときわ存在感を示していた大きなシデの木　❷作業現場だったスギ林の裏は、広葉樹が色とりどりに紅葉していた

緑の担い手を目指そう! にいがた山しごと情報誌

Niigata Forestry Magazine

林業事業体レポート File02

両津東部森林組合

【佐渡市】

現場は両津の中心部から車で約30分のスギ林。刈払機で除伐作業をする森林技術員

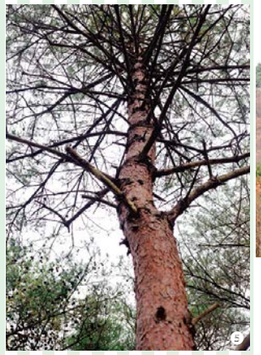
島内での地産地消を維持しつつ、新しい佐渡の林業に期待

佐渡で伐採された木は、大径木など一部を除いてほぼ100%佐渡で消費されている。つまり伐って製材して消費するという一連の流れが島内で完結しているということ。そのような流通事情もあって佐渡市内の森林組合は、すべて製材工場を持っている。しかし、50年前は島内に103軒あった製材工場も現在は25軒になり、その内、実質稼働しているのは13軒にまで減ってしまった。住宅建て替えのピークが約10年前にあったが、当時は佐渡産材が足りなく外材を使用。最近になってようやく地場産が成熟し出番を迎えたが、以前のような建築需要はなくミスマッチが生じている。山に資源が豊富にあっても活用できないのが現状のようだ。一方で、製材して出る廃材が、ここ数年来の石油高騰も影響し、燃料としての注文が増えている側面もある。さらに内地の森林組合ではあまり行われていない造林も、両津東部森林組合では継続して行っている。森林技術員の高齢化と若年層の減少問題も含め、新しい佐渡の林業の展開が求められているのだ。

❸刈払機の使用は、一定時間を超えたら休むことが基本。タオルで汗をぬぐいながらほっと一息の時間　❹勾配の急な斜面は足場も悪く、ちょっと踏み外しただけで転倒、滑落の危険性がある。斜面の歩き方には経験や体力が求められる　❺不要木がきれいに刈られた作業後の状態

アカマツ一本ごとに履歴管理 マツ林の保護がトキの繁殖を助ける

❶樹幹注入は対象となるマツの材積に応じて所定の薬材量を注入し、マツ枯れの原因となるセンチュウの増殖を抑制する。人間でいう予防注射のようなものだ。❷この日は、2日前に注入していた約30本のアカマツから薬液の空容器を抜く作業が行われていた



❸発注者に提出するため作業完了の写真を撮影中　❹外側から見た作業現場のマツ林。内陸に多いのがアカマツで、海岸沿いの防風保安林などはクロマツが主だ　❺枯れてしまったマツが再生することはない

佐渡における松くい虫防除

POINT

佐渡では松くい虫被害終息に向け、樹幹注入や伐倒駆除などが実施されている。取材現場で実施していた樹幹注入とは、プラスチックの容器に入った薬液をマツに注入し、1～2日後に空容器を抜く作業だ。注入は樹液の流動が落ち着き、薬液の浸透阻害の少ない冬期間に行うのが一般的。近年では、薬液の薬効期間の改善により、4～6年程の間隔で樹幹注入が行われている。かつて佐渡で野生のトキが生息していた頃は、マツを営巣木としていたことが知られている。これら営巣木、ねぐら木の候補となるマツ林の保全が求められている。

❼事務所でチェーンソーの修理やメンテナンスも担当する本間さん　❽森林組合所有のものから組合員のチェーンソーまで修理する。足元には順番待ちの機械がずらり

❻かつて竹は佐渡の主力産材として数多く内地に送られ、また竹製品の製造も主要な産業のひとつだった。プラスチック製品などが台頭するにつれ竹の需要は減り、竹林は繁茂する一方で荒廃が進んでいる。島内の竹林は概ね1,000haほどの分布

緑の担い手

～大自然の中で、プロ意識を持って働く人たち～

両津東部森林組合の森林技術員は6名。70代の大ベテランや特殊伐採の仕事人、そして林業経験の浅い若手も擁している。ベテラン勢は世代交代を意識して、事あるごとに現場に若手を連れていき、見せてやらせて覚えさせる。期待の若手2人に抱負を語ってもらった。

特殊伐採の名手、親松清さん（右）。若いスタッフは共に仕事をしながら、技術を吸収していく

Honma Yasuo

本間 康夫さん

年齢：35歳

林業経験：2年

一本一本木は違う。たくさん伐って経験値を獲得したい

出身は神奈川県です。両親は現在神奈川で暮らしていますが、父親の実家が佐渡で、こちらに土地と田んぼが残っていたので、それを受け継ぐような形で佐渡にIターンしました。伐採、保護、植栽と一通りは教わって出来るようになりましたし、この仕事が楽しいのでこれからも続けていきたいです。特に太い木を伐る時が一番楽しいかな。熟練の先輩のように、早く自分もきれいに木を伐れる職人になりたいですね。一本として同じ木はないので、その木を伐ったら終わり、もう学べないですよね。だからチャンスがあったら、自分に伐らせてほしいと声をあげます。経験値を獲得するには、たくさんの木を伐るしかないですから。

Kasuga Kazunori

春日 和則さん

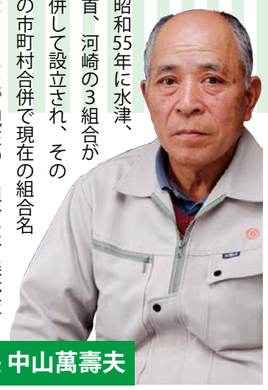
年齢：31歳

林業経験：8ヵ月

防災や環境保護の役割を果たしていると実感

もともと山が好きでこの仕事を選びました。自宅が山に近いこともあって山には慣れ親しみがあります。先輩から指導いただいて少しずつ仕事にも慣れてきました。急斜面で木や草に覆われたところでの作業なので足場が悪くて大変です。刈払機などの扱いにも十分気をつけますが、伐った木が自分のところに跳ね返ってくることにも注意しています。力を入れていないと木や枝を切った際に体ごと持っていかれる時もあります。これからももっと技術を磨いていきたいですね。木を育てていくことで土砂崩れがなくなったり、環境保護につながったりと、この仕事が大きな役割を果たしていることを実感しながら仕事をしていきたいです。

【事業主コメント】



昭和55年に水津、岩首、河崎の3組合が合併して設立され、その後の市町村合併で現在の組合名になりました。現在の当組合は、森林技術員が6名、製材工場が2名、事務所が6名という人員構成になっています。経営維持が厳しい現状ですが、この人員でなんとか頑張っています。若い森林技術員が入ってきていますが、中心になっているのは20年選手以上のベテラン達。山の仕事は危険が多いから、ベテランから若手にうまく技術を受け継いでもらいたいですね。山があって田んぼがあって海がある――水をきれいに保つために山林の保全は重要なんですね。

両津東部森林組合 代表理事組合長 中山萬壽夫

【事業体Data】

両津東部森林組合

住所／佐渡市下久知572-13　電話／0259-27-7156

設立／昭和55年（合併）　出資金／3250万円　従業員数／14人

勤務時間／8:00～17:00　主な勤務地／佐渡市

主な従事業務内容／森林整備・特殊伐採・木材製品製造業・病害虫防除